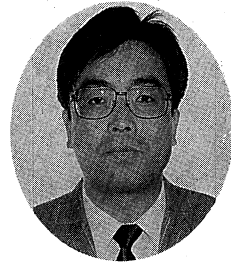


家庭訪問

佐久間 金治



朝六時

学校へ五キロの道を歩き始める

じり道 坂道

まがりくねる道

遠い 遠い

くたびれる

それでも歩く

ああ

ようやく学校の赤い屋根

私が新採用の年に担任した児童、

修一君が書いた詩です。家庭訪問の

季節になると彼の家のことが頭に浮

かびます。

修一君は、元気いっぱいの小柄な

三年生でした。しかし、授業中に眠

り込んでしまうことがよくありまし

た。みんなで起こしてもびくともし

ません。訳を聞いてみると、くたび

れてしまうというのです。彼は大変

遠いところから通学していたのです
が、その時の私は、困ったなと思う
だけでした。

五月に家庭訪問があり、受け持ち
の児童二十名の家を訪ねることにな
りました。車を持たない私は、一軒
ずつ歩いて訪問します。いざ彼の家
へ行こうとすると、先輩の先生が「午
後の今から滝ノ原部落まで歩いて行
つて来るのは無理だよ。」と言うので
す。私の認識不足から予定を変更し
なければなりませんでした。

いよいよ家庭訪問の日。集落を抜
け、川沿いの県道をはずれるとじゃ
り道です。ゆるやかな登り坂が続き
ます。車に出合うこともなく、大き
くカーブすると道祖神を祭つたよう
な小さなほころが見えてきます。そ
して分校の青い屋根が木々の葉の間
から見え隠れしてくると、彼の住む
滝ノ原部落でした。一時間半たつぷ
りの道のりでした。

この部落は標高が約七〇〇メート
ルあり、家の中は真夏だというのに
ひんやりして、汗もすつと引いてし
まうようでした。母親と祖父が待つ
ていてくれました。修一君の家庭で
の生活の様子をはじめ、彼の父親が
去年伐採作業中に事故死したこと、
ここはもとと木地師の部落であつ
たこと、住む人がほとんど減り現在
は三軒しかなく、それもあと何年か

でここを降りてしまう予定であるこ
となど、いろいろな話を聞きました。

帰り道は、暑さもさほどではなく
なり、修一君に途中まで送ってもら
いました。道すがら、これを毎日朝
夕続ければ、子どもの足ですから、
疲れて眠ってしまうことも仕方な

決断

青津 伸一

一人に一人、こんな出現率の病
気を持つて長男が生まれてきた。先
天性胆道閉鎖症である。ここ二、三
年よくマスコミに取り上げられてい
る。島根医科大学で生体肝移植をした
杉本裕弥ちゃんも同じ病気である。
生まれつき肝臓から腸へ胆汁を流す
管が閉塞しているため、肝硬変とな
り死亡する病気である。

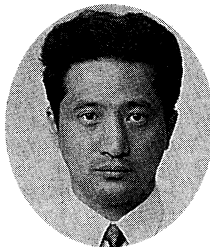
この治療には欧米では肝臓移植が
一般的であるが日本では臓器移植が
認められていないため、腸の一部を
肝臓にはりつける方式をとってい
る。後者は、成功率も低く、治療後
の経過も良くない。この方法による
手術は二回ぐらいが限界で、それで
も胆汁が流れないときは打つ手がな
くなってしまふ。

私の息子は、生後六カ月の間に二

いことだ、とうなずけるような気が
しました。

「子どもの非を責め、叱ることは簡
単であるが、子どもを知るといふこ
とは本当に難しい」とその時強く思
つたものでした。

(三春町立三春小学校教諭)



回の手術を受けた。しかし、症状が
ひどく、胆汁の流れ口が見つからず、
腸を形だけつけただけにどどまって
しまった。息子のおなかには真一文
字に大きな傷が残り、腕や顔には点
滴の跡が残っていた。私達夫婦は、
ひたすら奇跡を願うしかなかった。

私達は、主治医など多くの方々と
移植についての相談もした。しかし、
海外での手術には莫大な費用がかか
るといふ。一回の手術費が約五千万
円。他に、渡航費や入院費などであ
る。そればかりではない。海外へ出
かけている子供も多く、移植の順番
待ちの間亡くなるケースも少なく
ないというのだ。私達は、決断でき
なかつた。

最後の望みとして、国内での移植
再開に期待し、病院近くのアパート